

宮城県山元町 学校再開の現状ヒアリング・視察報告【作成：伊藤俊介（東京電機大学）】

日 程：2011年7月20日（水）

訪問者： 教育施設小委員会

伊藤俊介（東京電機大学）、湯澤正信（関東学院大学）、吉村 彰（東京電機大学）

現地研究者

石井 敏（東北工業大学）

お話を伺った方： 教育長・森 憲一氏

中浜小学校長・井上 剛先生，山下第二小学校長・渡辺孝男先生

資 料： 地図：山元町と被災状況の概要について（別紙）

地図：津波による浸水状況図

平成23年度学校児童生徒動態調査集計表

毎日新聞2011年4月26日 記事

小中学校の現況と今後の学校運営等について

中浜小学校学校要覧，避難訓練実施計画図

坂元小・中浜小併設に伴うメリット・デメリットについて

坂元小・中浜小各校の特色を生かす授業時間確保の試み

3.11 東日本大震災の記憶（教諭の手記）

山下第二小学校学校要覧，教室配置図

調査内容与时程：

1. 13:00~14:15 中浜小（坂元小内）にてヒアリング（教育長・森氏，校長・井上先生）
2. 14:30~15:00 中浜小，山下二小の被災校舎視察，森氏の案内で
3. 15:15~17:00 山下二小（山下小内）にてヒアリング（教育長・森氏，校長・渡辺先生）

1. 町の被害の概要

- ・山元町は坂元町・山下町が合併してできた町。もともと高台が養蚕業で栄えた町だが，100年前に平野部に常磐線が開通したのに伴い平野部も開発されていった。沿岸の平野に立地する中浜小，山下第二小の2校が津波で被災。中浜小は2階天井まで浸水，山下二小は1階天井まで浸水。
- ・両校の周辺住宅地も大きな被害を受けており，特に中浜小周辺はまったく住宅が残っていない。鉄道も線路や路盤が流出した。
- ・中浜小は坂元小，山下二小は山下小（移転先はいずれも同じ中学校区の高台にある）でそれぞれ再開している。
- ・地震・津波による町内の死者599人，行方不明者22人（7月1日現在）。小中学生では，小学生1人，中学生4人が亡くなった。

- ・中浜小，山下二小ともに避難誘導した児童はすべて無事だった（毎日新聞 2011 年 4 月 26 日「証言 3.11」に詳しい）。1 名，帰宅後に自宅で津波に遭って亡くなった。
- ・町の人口は 16, 700 人から 14, 800 人に減少。中浜小・山下二小は約 3 分の 1 が転出した。



被災校と移転先の位置関係(Google Map)

2. 中浜小学校（坂元小校舎内に併設）

○地震発生時・避難の状況

- ・ 6 時間目の授業中だった。低学年は既に下校時間だったが，いっしょに下校するため上級生を校庭で待っていた。
- ・ テレビで大津波警報が発令されているのを知った。避難訓練では高台の坂元中に避難することになっているが，津波の到達時間が 10 分との情報を見て屋上への避難を決めた。先々代の校長が徒歩で高台までの避難時間を確認して 20 分かかると分かっていて，20 分かけて避難しては間に合わない，また避難経路の道路の安全が確認できないので，屋上へ上がる判断をした。
- ・ 3 月 9 日に三陸沖で震度 5 の地震があり，津波警報・注意報が発令され，その時にも 2 階に待避した。以前から避難訓練時に担任たちは経路を議論していた（高台が遠いことについて）。屋上は屋根スラブの上に小屋が載る構造のため，「屋根裏」が津波避難時に使える

と考えていた。(山下二小も同じ設計者, 同じ構造。ただし, 津波避難を想定しての設計かは不明)

- ・「非常時に突然マニュアルにないこと(屋上への避難)を校長が指示しても先生たちは聞かないだろう。ふだんから意思統一をしていたことが良かった。3月9日の地震はある意味, 予行になった。」(校長)
- ・はじめは2階に全員を集めて点呼, 15:30頃に屋上へ上がった。津波到達は15:50頃。
- ・保護者は何人か迎えに来たが屋上に誘導した。児童59名, 教職員14名, 地域住民合わせて約90人が屋上に避難し, 翌朝, 救援が来るまで一夜を明かした。
- ・津波の1波目は校庭の土留めブロックで止まった。2波目から2階に届いた。3波目はもっと高く, 屋上まで届きそうな高さだったが2波目の引き波と衝突して崩れた。おかげで助かった。津波によって近くの河口は入江のようになってしまった。
- ・オープンスクールなので間仕切りを含め内部は完全に破壊され, 物品も流出。壁に囲まれた音楽室や校長室のみ比較的なのが流出しなかった。金庫内の卒業証書は回収し, 手渡すことができた。
- ・津波は南東(校庭)側から到達。引き波を西側にある体育館が遮る形となり, 校庭には瓦礫はほとんど流れて来なかったため翌朝, 校庭にヘリが着陸できた。
- ・屋上には食料・水は置いていなかった。避難時にずきんやジャンパーを教師がかき集め, 毛布も体育倉庫にあったものを水が引いてから取りに行った。トイレはポリボックスを使った仮設トイレを作り, 灯油庫を利用して男女をわけた。
- ・児童は小屋裏に入っていたので津波を見ていない。そのためあまり恐怖心はなかったようだが, 翌朝ヘリに乗ってから町の様子を見てショックを受けたかもしれない。
- ・震災後, 臨時休校のまま年度は終了。3月23日に卒業式にかわる「お話の会」を実施した。

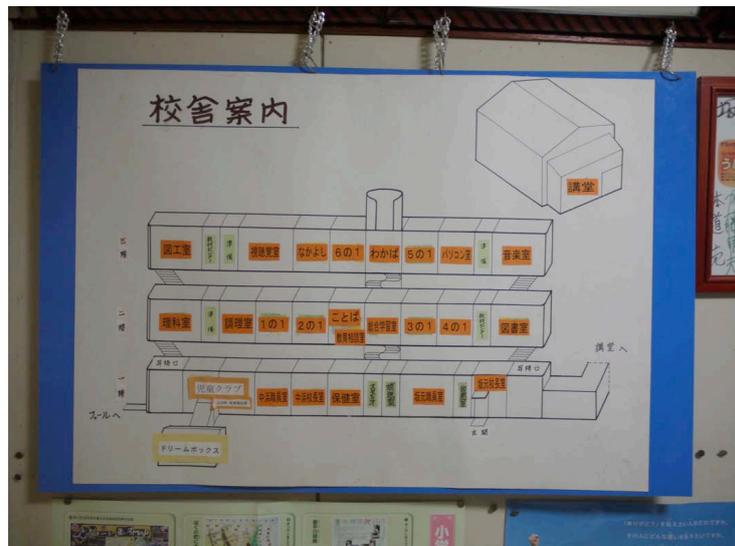
○坂元小での学校再開

- ・余裕教室が不足しているため合同授業を行っている。両校の同学年2学級を1クラスにまとめ, 担任2人が教室に入る。両校とも学年1学級, 学年あたり児童数が坂元小は13~25人, 中浜小が3~9人であり, 最大でも合計31人であることから可能な方式である。
- ・授業方法は「学年毎に効果的な方法で」と担任に任せている。学年毎にチームティーチング, 主担当+個別指導の役割分担, 習熟度別グループ等の方式を織り交ぜて授業を行っている。
- ・チームティーチングに教員が不慣れであるため, 軌道にのるまでは負担が大きい。
- ・担任が2人いることで手厚いケアが可能となっている。中浜小の児童にとっては, 転出した同級生も多いが, 逆に賑やかになったのは良いかもしれない。落ち着かない児童もおり, 保健室でのフォローを含めてケアしている。
- ・すべて合同授業では学校の個性が消えてしまうので, 道徳や総合学習は学校毎に分けて行っている。「中浜らしさ」をどう維持するかが課題。

- ・職員室・校長室は別々に設け、職員会議等も基本的には別々に行う。月曜日の朝に合同運営会議（校長，教頭，教務主任）を開き，日々の連絡調整には教務主任が双方の職員室を行き来している。
- ・児童数は震災前は59名，地震後の転出により現在36名。うち25名が仮設住宅・避難所で生活。自宅通学は6名，親戚宅は5名。徒歩・自転車・送迎により通学している。
- ・山元町では「間借り」と呼ばず，あくまで2校の「併設」と位置づけている。2つの組織が一つ屋根の下にいるという考え。（教育長）



玄関の表札（併設なので同列）



教室配置図



教室を使用した中浜小校長室 物品が多く置いてある

3. 被災校舎の視察

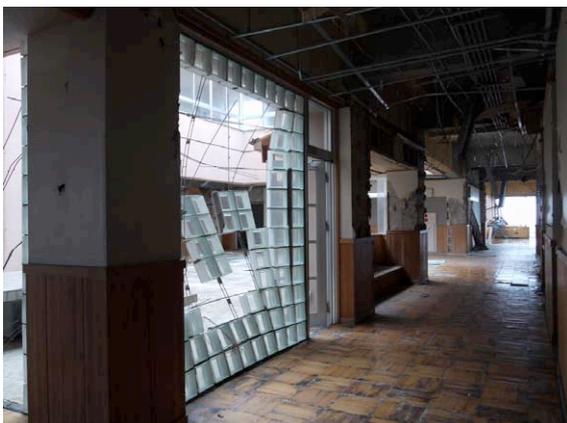
○中浜小学校



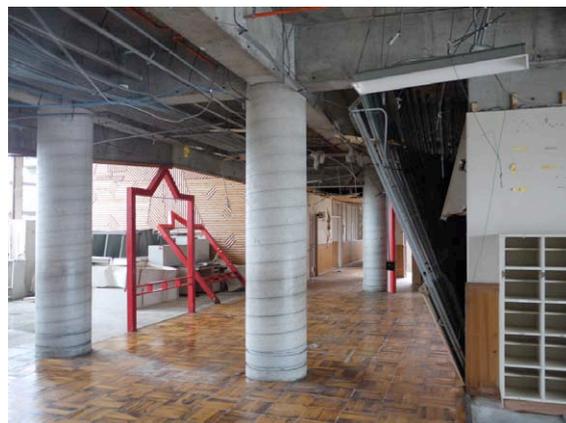
躯体は残るが内部は壊滅的な被害を受けている



体育館は床がめくれあがっている



校舎内はパーティションも流されている



天井・壁もはぎ取られて流出



屋上



避難した小屋裏



屋上への階段



校庭が廃車置き場になっている



周囲の住宅は基礎を残して流出

○山下第二小学校



1階が完全に流出した

4. 山下第二小学校（山下小校舎内に併設）

○地震発生時・避難の状況

- ・終課の後で、2年生のみ下校していた。地震の揺れで倒れたものはなかったが、揺れが10分以上続いた。まず校庭に避難して点呼をとった。
- ・保護者が迎えに来はじめ、引き渡しを始めたが、ある近隣住民が「津波が来る、逃げろ！」と知らせてくれた。そこで高台の役場に避難することとし、出せる自動車を全て出し、先頭を地元の先生に、低学年から乗せて移動を開始した。自動車に乗り切れない児童は教員の引率で徒歩避難した。教員の自動車はピストン輸送。途中で追いついた保護者の自動車に乗った児童もいる。
- ・校長は学校に残り、保護者の対応。後から迎えに来た保護者にも役場の方に逃げるように誘導。津波が来たところで2階に避難し、そのまま1人で一夜を過ごした。21時頃ようやく携帯電話が避難している教員とつながり、互いの安全を確認できた。
- ・津波については、6mの堤防があるので想定していなかった。しかし、教員どうしでは「万一津波が来た時には役場しかないね」という話は普段からしていた。
- ・質問：屋上への避難は考えたか？→考えたことはあるが、屋上へは狭い急な階段が1箇所あるだけで、200名の大人数を避難させるのは困難。

○学校再開までの経緯

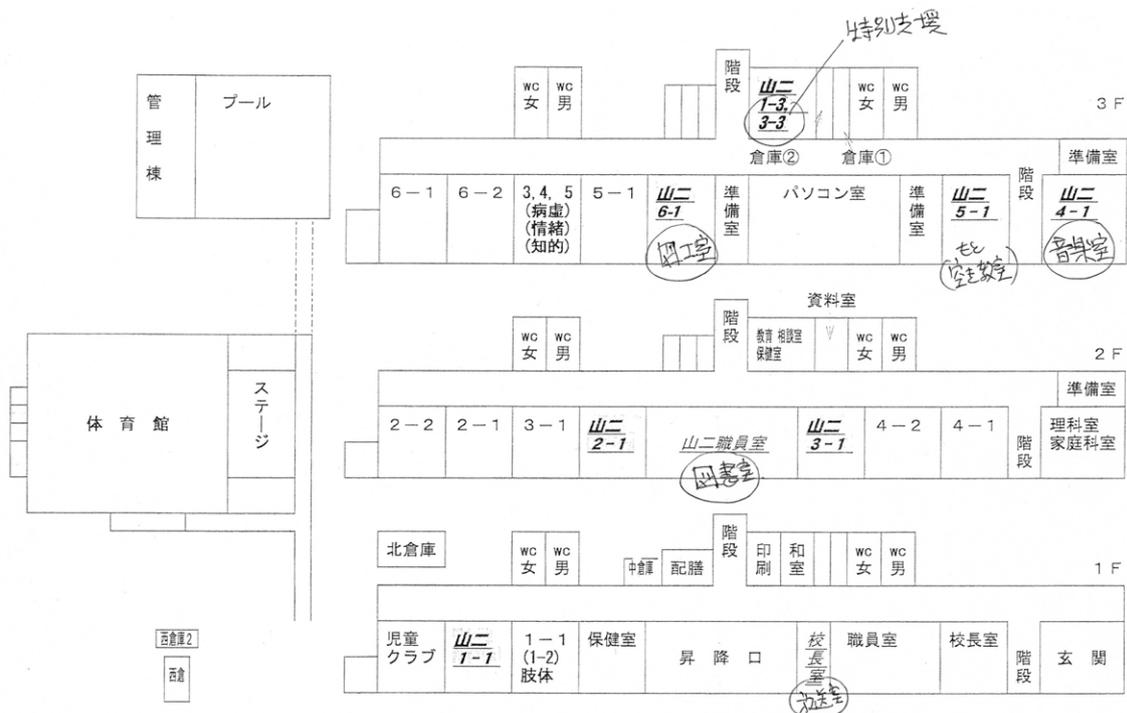
- ・震災後は山下中の避難所運営（山下中体育館は6月まで避難所だった）に加わっていた。数日間のうちに「学校をどうする」という議論が出始めた。
- ・スペースがあり、山下中に避難している児童が通学できる場所として、山下小体育館や役場横の公民館も考えた。公民館は避難所になっているので除外。体育館も消防等の応援の宿泊所になっていた。山下小校長、教育長と教室を空けてもらえるか、時間割をどうする等を相談し、3月末に山下小で再開することが決まった。
- ・両校の校長・教頭・教務主任で教育目標や行事予定のすり合わせを行った。行事は、できるものはいっしょに行うことにした。今年度は運動会、委員会、クラブ活動は合同で実施。時間割は山下小のものを使うことにした。

○教室配置と運営

- ・普通教室が十分に空いていたわけではなく、山下小ではいくつかあった特別支援学級をまとめたり、特別教室の一部を転用してくれた。図書室を職員室に、音楽室、図工室を教室に使っている。
- ・新年度の教室配置が既に決まっており、「ご破算にして下さいとは言いにくい」ので、空いた箇所を使う形で教室が分散している。
- ・質問：教室が分散していることの不都合はないか？→「1年生だけ離れているので、異学年の自然な交流が生じにくい。縦割り活動もやりやすくない。だが、両方の学校の1年

生どうしが同級生感覚になっている。高学年も横の交流が多い。これは良い点だと思う」
(校長)

- 学校が同居していることよりも、今までの環境にいられないことのストレスの方が大きいように見える。(校長)
- 図書は学年毎に分散して廊下に並べている。
- 元の校舎の2階は残っている。2階にあった図書や理科の実験器具は使えるが、置く場所がないので必要に応じて取りに行き行って使っている。机・椅子は持って来て使っている。
- 児童数は前年度 202 名から 133 名に減った。ほとんどの児童は自宅が被災し、およそ 80 名が仮設住宅に住む。通学手段は徒歩・町営バス・送迎。
- 海岸沿いに堤防と松林があるため、海が学校からは見えない。津波で松林が流されて初めて海がこれほど近いのかと実感した。(校長)



[平成23年度]

山下・山二小学校教室配置図
山小教室 山二小教室



図書室を職員室に使用



放送室スタジオが校長室



廊下に置かれた図書



図書室を教室に使用



音楽室を教室に使用



音楽室は靴を脱いで入る



一室を区切った特別支援学級

5. 今後について

- ・中浜小、山下二小とも今のところ災害復旧工事の予定はない。来年度は併設運営の見込み。
- ・校舎は復旧が不可能ではないが、海岸に近く鉄道よりも海側にあり、津波に対する多重防御ができないので、そのまま再開することは考えにくい。
- ・学校の再配置は、地域住民がどの程度戻ることが分からないと決められない。今後の土地利用計画をふまえて考えなければならない。周辺がほぼ完全に流出した地域と、住宅がある程度残っている地域でも事情は違ってくる。
- ・質問：今回の学校併設で、同じ中学校区（コミュニティ）であることはプラスに働いているか？→「もともと浜は浜、山は山という違いがあり、ふだんから交流が深いわけではないので、あまり関係はないと思う。ただ、中学校に上がる前にいっしょになっているので、これからは一体感はあるかもしれない」（教育長）



周辺状況の違い 左：坂元駅（中浜小最寄り駅）周辺 ほぼ完全に流出した
右：山下駅（山下二小最寄り駅）周辺 住宅が一部残っている

6. 調査者コメント

- ・今回ヒアリングした2つの小学校の、他校の校舎を借りての学校再開では、2つのことが際立った。一つは、教育委員会が、これは、間借りでなく併設であると、まず明確に位置付け、被災校への配慮をしたことである。2点目は、両校の授業再開形態の違いである。

中浜小は、避難先の坂元小も小規模校であった(両校合わせて、児童数 172 人)こともあるが、坂元小の各クラスの中に入り、30名のクラスを形成した。つまり、合同授業の形をとり、そこに、2校の先生が、つまり、2人の先生がつくこととなり、T.T. が自然と出来上がった。被災という状況の中で、こうした、手厚い指導形式をとれる新しい学習形態が実現したわけである。

一方、山下小(児童数 226 名)に同居した山下第二小(児童数 201 名)は、山下小として新学学期の学年配置が決められていた中で、それを変更することなく、空き教室をつくり、入居した。結果は、校舎内にバラバラに配置され、山下小の学年のまとまりとも無関係であった。実際の授業の流れや児童の生活を見学したわけではないが、建築計画上のことを考慮する余地が多々あると考えられる。

中浜小は、かつて自分が枝校であった親校の中に再開した。山下第二小は、そうした深い関係はな

く、一番近い学校として、山下小の中にはいった。こうした事が、原因となったかどうかは、不明であるが、結果は、かなり違ったものとなった。

【湯澤】

- ・今回被災した山下第二小及び中浜小はいずれも海岸からほど近い場所での津波被害を受けた例である。山下第二小の児童一名が犠牲(保護者が引き取った後に津波で犠牲)になったが、その他の児童は二校いずれも無事。しかも二校の避難経過は全く好対照である。前者は、津波が来る直前、咄嗟に先生や保護者・地域住民の自家用車でピストン輸送し高台に避難させた例であり、後者は時間的に高台に避難する時間が無く、校舎屋上(二階建ての建物)に避難させた例で犠牲者がほとんどなかったのは不幸中の幸いといえる。また、4カ月経過した避難先での授業再開も二校異なった展開を見せていた。山下第二小は山下小学校の教室を空けてもらい山下小に併設(同居状態)で授業を行っているのに対し、中浜小は坂元小の各クラスに合流する形(一クラス二人の担任)で運営されている点である。山下第二小は児童数(被災前は202だったが現在133名程度)がやや多いのに比べ、中浜小は(被災前は59名だったが現在は36名)と少ないことがこれらの違いに現れている。被災した校舎は、躯体は問題ないが、サッシや間仕切り、内装部分、設備等は跡形もない状態で、復旧するには相当な費用が必要。今後、どのようにするか、常磐線が壊滅的被害を受けたため、町の復興計画が定まらない以上、学校の復興復旧の未透視は立てられない状況という。
- 今回訪問した事例は震災後4カ月余り経過した時点でもあり、瓦礫等はほとんど片付けられ、田畑には雑草が生い茂る状態で震災直後の悲惨さはやや薄れていると思われた。しかしこんな大きな被害に遭ったにもかかわらず先生をはじめ子どもたちが逞しく勉学に励んでいる様子を見るにつけ、頭の下がる思いであった。

【吉村】

以上

山元町と被災状況の概要について



23



1. 人的被害の状況〔7月1日現在〕
(単位:人)

死者数	599
行方不明者数	22
重傷者数	9
軽傷者数	81

2. 家屋被害の状況〔7月1日現在〕
(単位:人)

全壊	2,175
大規模半壊	526
半壊	469
一部損壊	981
計	4,151

3. 一次避難所の状況
(単位:人)

避難所名	4月1日現在	7月1日現在
1 中央公民館	1,300	188
2 山下第一小学校	350	0
3 山下中学校	780	36
4 坂元支所	250	47
5 坂元中学校	330	0
6 真庭区民会館	150	0
7 老人憩の家	130	0
8 知楽荘	120	0
計	3,410	271

4. 児童生徒数〔7月1日現在〕
(単位:人)

学校名	児童生徒数
1 坂元小学校	136
2 山下第一小学校	36
3 山下小学校	222
4 山下第一小学校	105
5 山下第二小学校	132
6 坂元中学校	96
7 山下中学校	262
計	989

※津波被害を受けた②⑤の学校については、1及び3の学校にそれぞれ併設し授業を行っている。

5. 主な指標等

1 人口 (7月1日現在)	14,865人
2 国勢調査人口 (H22)	16,711人
3 国勢調査人口 (H17)	17,713人
4 面積	64.48㎡
5 団地類型	IV-1
6 財政力指数	0.38
7 標準財政規模	4,444,253千円
8 歳出決算額 (H22)	5,485,716千円
9 経常収支比率	90.9%
10 実質公債費比率	14.6
11 積立金現在高	1,996,358千円
12 地方債残高	5,736,237千円

津波により2階天井まで浸水被害 (校舎・屋内運動場) ※災害復旧工事予定なし

1
2
3
4
5
6

宮城県 岩沼市・巨理町・山元町